

～民衆のために生きた土木技術者～

みやもと たけのすけ
宮本 武之輔



大正後期から昭和の戦前を代表する土木技術者、高級官僚。
興居島に生まれ、東京帝国大学を首席卒業後、内務省土木局の
技官となり、信濃川大河津分水路の可動堰建設工事を指揮し、わ
ずか4年で完成させ、越後平野を洪水から守り、民衆のために尽
くした。

経 歴

- 1892年(明治25年) 愛媛県 興居島 由良に生まれる。
- 1917年(大正6年) 東京帝国大学を首席卒業、内務省土木局技官となる。
- 1919年(大正8年) 荒川放水路開削事業小名木川閘門の設計施工を行う。
- 1920年(大正9年) 日本工人倶楽部を発足し、機関紙「工人」発刊する。
- 1927年(昭和2年) 信濃川大河津分水路自在堰復旧の設計を命じられる。
- 1928年(昭和3年) 工学博士となる。(1937年に東京帝国大学工学部教授を兼任)
- 1931年(昭和6年) 信濃川大河津分水路可動堰建設工事が竣工する。
- 1936年(昭和11年) 「治水工学」を著す。(多数の土木技術書を遺す)
- 1938年(昭和16年) 興亜院技術部長に就任する。
- 1941年(昭和16年) 企画院次長に就任する。肺炎のため急逝(享年49歳)

1 宮本武之輔みやもとたけのすけの生涯しょうがい

明治 25 年に松山市沖の興居島ごごしまに生まれ、小学校の頃、父親が事業に失敗し、全財産を失い中学校に進学できず、瀬戸内海航路の貨客船かきやくせんのボーイとなって家計を助けた。

その後、興居島ごごしまの篤志家宮田兵吉とくしかみやたひょうきちの援助を受け勉学の道に戻り、私立錦城中学校きんじょうちゅうがっこうに編入学し、異父兄窪内石太郎いふけいくぼうちいたろうの影響を受け工科のコースを歩む決心をする。第一高等学校を無試験入学、東京帝国大学土木工学科を主席しゅせき おんし(恩賜の銀時計組)で卒業後、大正 6 年内務省ないむしょうに入省する。

利根川とねがわ、荒川あらかわの大規模河川改修を手掛け、荒川では、「小名木川おなぎがわ 閘門こうもん」の設計施工せつけいせこうを担当し、大正 1 2 年から大正 1 4 年の 1 年半、鉄筋コンクリート構造物の研究のため、欧米諸国おうべいしょこく(フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ)を歴訪した。

昭和 2 年の信濃川大河津自在堰陥没事故で、信濃川が干上がり農業用水が枯渇する事態となったため、内務省の威信をかけた可動堰建設の陣頭指揮しなのがわおこうづじざいぜきかんぼつじをとり、出水しなのがわや風雪、風土病と戦いながら、わずか 4 年後の昭和 6 年に完成させ、越後平野えちごへいやを洪水から守り、民衆のために尽した。

また、コンクリート工学博士となり、「鉄筋コンクリート」「治水工学」等を執筆、昭和 1 2 年に東京帝国大学教授を兼任する。

日本工人倶楽部発足など、技術者の地位向上の運動を展開するとともに、科学技術の体制づくりのため、科学技術庁の前身の技術院ぎじゅついんの設立に取り組んだ。

昭和 1 5 年に内務省土木局から、内閣直属の中国占領地域ないむしょうどぼくきょくに対する最高行政機関であった「興亜院ないかくちよくぞく」の技術部長ちゅうごくせんりょうちいきに抜擢され、昭和 1 6 年には国の最高政策立案機関であった「企画院さいこうせいさくりつあんきかん」の次長きかくいん(官僚のトップの一つ)に就任。

昭和 1 6 年 1 2 月 2 4 日、東京で肺炎のため急逝(享年 4 9 歳)

2 しなのがわ 信濃川 おおこうづぶんすいろ 大河津分水路 かどうぜきけんせつこうじ 可動堰建設工事



信濃川大河津分水路可動堰（現在は新堰が建設され一部が保存）

みやもとたけのすけ 宮本武之輔の生涯で一番の功績は、しなのがわ 信濃川 おおこうづぶんすいろ 大河津分水路 かどうぜきけんせつこうじ 可動堰建設工事である。

昭和2年6月24日、大正11年に完成したとうよういち 東洋一の規模を誇ったおおこうづぶんすいろ 大河津分水路の自在堰がじざいせき 激流に洗われ陥没したのであった。

自在堰が機能しなくなり、信濃川の水が分水路側に流れ、本流に流れ込む水が枯渇し、田植え時期の流域農民は激怒した。

ないむしょうどぼくきょく いしん 内務省土木局の威信は失墜し、叩きのめされた。陥没した堰の修復工事の現場の主任技師として投入されたのが、弱冠36歳の宮本武之輔であった。

就任のあいさつ ひそく 挨拶は悲壮なもので、「えいじょく 技術家としての栄辱を決せんとす」「ちよっかつ 内務省直轄工事のためのせつじょくせん 雪辱戦」「災害の犠牲となれる不幸なる同僚のための弔い合戦」・・・声を震わせ幾度も絶句した。

陥没した自在堰の復旧は、技術的に無理であり、内務省は原形復旧を断念し、可動堰を新たに建設することとなった。

宮本武之輔は、工事事務所に隣接して6畳の小屋を建てさせ、寝泊まりし、自在堰に代わる可動堰の設計施工をすべて手掛けた。

工事が佳境を迎えた昭和5年8月2日、大正3年以来の集中豪雨により堤防決壊の危険が迫ったため、下流の被害の拡大を防ぐため独自の判断で、可動堰の工事現場を洪水から守っていた仮締切を切った。全責任をとる覚悟であった。

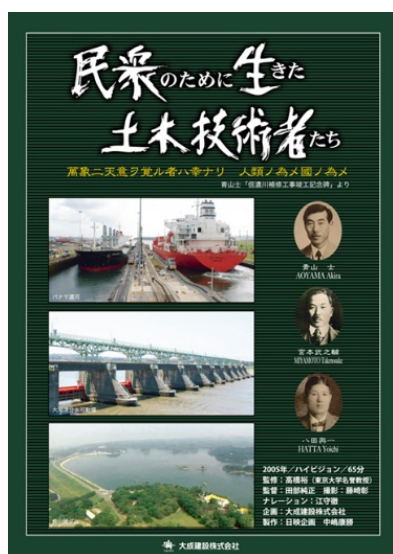
これにより、工事は遅れたものの、寒風の冬も猛暑の夏も先頭に立って働く獅子奮迅の活躍で、実質3年余りという驚異的な工期で可動堰を完成させた。

昭和6年6月20日、内務大臣や新潟・長野・山形などの県知事らを招いて竣工報告式が現場で盛大に行われた。

その後、越後平野は日本を代表する穀倉地帯に生まれ変わり、人身売買の悪習も一掃された。

(参考)

宮本武之輔紹介映画 「民衆のために生きた土木技術者たち」



2005年・ハイビジョン・65分
監修＝高橋裕（東京大学名誉教授）
監督＝田部純正
撮影＝藤崎彰
ナレーション＝江守徹
企画＝大成建設株式会社
制作＝大成建設株式会社
(株)日映企画 中嶋康勝

公益社団法人 土木学会の土木人物アーカイブスで視聴可能
(<http://www.jsce.or.jp/contents/avc/index.shtml>)

宮本武之輔の常設展示

愛媛県生涯学習センター 愛媛人物博物館

(松山市上野町甲 650 番地 TEL:089-963-2111)

3 技術者の地位向上運動

みやもとたけのすけ ふぐう
宮本武之輔は、不遇な生い立ちから、有力な後ろ盾があったわけ
ではない。

だいいちこうとうがっこう
第一高等学校時代の日記には、「われは、弱者の味方たらむかな。
しんせい
神聖なる工学 テストチューブを振るには他に適当な人ある可し。
よ どぼく おやかた
予は『土木の親方』たるに甘むぜむ」との記述があり、将来は民衆
のために役立つ仕事がしたいと決意し、土木技術は、民の幸せを
実現すると信じて土木技術者を目指した。

しかし、ほうかばんのう
しかし、法科万能の時代であり、内務省土木局では、局長以下、
道路、河川、港湾の各課長はすべて法科出身者であった。

ぎかんれいぐう
宮本武之輔の生涯は「技官冷遇」の壁を打破するためにあったと
いっても過言ではない。

大正9年12月17日、技術者の団結を訴え、同志の内務省の技
師らと「日本工人倶楽部」(N・K・C)を発足、機関紙「工人」
を発刊し、運動の中心的指導者として、実践活動の先頭に立った。

その後、内務省技手を中心とした「土木倶楽部」、高等官の「土
木協会」、旧帝大技師の「昭和土木工学士会」の流れに繋がった。

また、昭和6年の第二次若槻内閣において、財政状況により、内
務省土木局の技術者の人員整理案(約3千7百人)が示された。

みやもとたけのすけ
宮本武之輔は政府内での反対運動の中心として活動し、模索の末
「失業する技術者」を職場確保のため、まんしゅうこく
満州国に送り込む案を具
体化させた。

その後、昭和12年に政府の6省の技術者を束ねた「六省技術官
有志懇談会」後に「六省技術者協議会」と改称し、厚生省が加わ
り「七省技術者協議会」となり、技術者集団を国家改革のエネル
ギーとする運動に乗り出すが、道半ばで倒れてしまう。

4 生まれ故郷の興居島の顕彰碑と銅像



興居島の由良支所横（由良港から徒歩2分）

（顕彰碑）

偉大なる技術者／宮本武之輔博士／この島に生る
宮本武之輔君は正義の士にして信念に厚し
卓抜せる工学の才能と豊かなる情操と秀でたる
文才とを兼ね具へ／終生科学立国を主唱す
知る者皆其の徳を慕ふ

明治25年1月生

東京帝国大学工学科卒業

内務技師として我国土木事業に盡瘁(じんすい)

興亜院技術部長として大陸の建設事業を指導

企画院次長として産業立国の策定に挺身

昭和16年12月東京に於いて没す

昭和29年5月 全日本建設技術協会が建立

（銅像）

平成25年1月5日

宮本武之輔を偲び顕彰する会建立

宮本武之輔を偲び顕彰する会ホームページ

(<http://miyamoto-takenosuke.biz/>)

5 みやもとたけのすけ りやくねんひょう 宮本武之輔の略年表

和暦	西暦	年齢	主な事柄
明治	明治25	1892	0 1月5日、愛媛県和氣郡興居島に、宮本藤次郎・セキの長男として誕生
	明治39	1906	15 5月、天竜丸の船員見習となる
	明治40	1907	16 4月6日、私学錦城中学へ編入学 ※この日から「日記」始まる
	明治43	1910	18 3月、錦城中学、首席卒業 9月、第一高等学校へ無試験入学
大正	大正元	1912	20 11月、校内の煙突から墜落
	大正2	1913	21 1月7日、道後温泉で療養生活、父藤次郎死去 4月、四国八十八箇所の遍路の旅に出る
	大正3	1914	22 9月、東京帝国大学工科大学土木工学科入学
	大正6	1917	25 1月9日、母セキ死去 7月、東京帝国大学、首席卒業 8月、内務省東京土木出張所利根川第二期改修事務所安食工場赴任
	大正8	1919	27 8月、内務技師、敍高等官七等任官、東京第一土木出張所 荒川放水路開削事業小名木川閘門の設計施工
	大正9	1920	28 4月10日、結婚(武之輔28歳、中路幸子18歳) 12月、日本工人倶楽部発会、機関紙「工人」発刊
昭和	昭和2	1927	35 7月、新潟土木出張所兼務となり、信濃川分水大河津の自在堰復旧工事の設計を命じられる 11月、信濃川補修事務所主任、信濃川維持大河津工場主任、新潟土木出張所兼土木試験所勤務
	昭和3	1928	36 1月、工学博士となる
	昭和5	1930	38 8月、新潟が集中豪雨に見舞われ、信濃川分水大河津可動堰の仮締切を切る
	昭和6	1931	39 6月、信濃川補修工事竣工
	昭和11	1936	44 「治水工学」を著す
	昭和12	1937	45 9月、東京帝国大学工学部教授となる
	昭和14	1939	47 12月、宮田兵吉重体の知らせを受け、看病のため興居島へ
	昭和15	1940	48 1月8日、宮田兵吉死去
昭和16	1941	49 3月27日、異父兄・窪内石太郎死去 4月、第七代企画院次長就任 12月24日、肺炎のため急逝(享年49)	

(参考文献)

高崎哲郎(監修)「久遠の人 宮本武之輔写真集」1998年 (社)北陸建設弘済会

高崎哲郎 「評伝・工人 宮本武之輔の生涯」1998年 ダイヤモンド社

